ー探求・川にちなんだ万葉集の歌ー

万葉の川心 第16回

川崎市立木月小学校教諭　舩田　園子

川を詠む

わが紐を　妹が手もちて　結八川
また還りみむ　萬代までに

（巻第七　一一一四番歌）

色打掛を羽織った花嫁が、私の横を静かに通り過ぎる。木に登っていたおてんばな女の子が、いつしか美しい「女性」になり、今日嫁いでいく。祝福の拍手のなか、私は一人、泥んこになって遊んだあの頃を思い出していた。自転車を草の上に倒して、かけ上がった土手。大空に吸い込まれる笑い声。少女だった私達。「昨日、あの川に行ってきたよ。」と幼なじみの花嫁に、心の中で話しかけた。暗くなるまで、未来の夢を語り合ったあの川に。

いとしい君が紐を結うなり、結八川。この美しい川を、また訪れて眺めよう。これからさき、いつまでも。「わが紐を妹が手もちて」は、結八川をみちびき出すための序詞である。言葉の響きや意味合いで、自然に「結八川」につながるだけでなく、この川の美しい景色をいとおしむ心と、妻を愛しいと思う心とが溶け合って、伝わってくる。結八川は、奈良県吉野を流れていたという説もあるが、未詳の川である。

去年の今頃、子ども達の間で、プロミスリングが流行っていたのを思い出す。きれいに組まれた紐を手首に結び、それが自然に切れたとき願いが叶うというものだ。子どもの遊びと思っていたら、万葉の昔にも似たような信仰があることを知った。人から想いを寄せられると、装束の一つである裳やはかまなどの紐（下紐）が自然に解けるというのであるやはり、人の心は変わらないのかもしれない。

万葉集の一四一番歌に、願いの心をこめ、誓いを立てたしるしとして松の小枝を結ぶという民族信仰「結び松」が歌われている。昔から「結ぶ」という動作には、手を通して、心がこもると思われていた。旅立つ夫の紐を妻が結ぶ。結ぶことで「どうぞご無事で」という心がこもる。夫は旅先で、その紐を見ては妻を思い出している。裳の紐が二人の心を結んでいる。上代では、人の魂は、ものに触れるとそこに宿ると信じられていた。そのことを詠んだ歌は、千曲川の細石など、数知れない。

この一一一四番歌をうけて、同じ結八川の歌が一一一五番歌に選ばれている。

妹が紐　結八川内を　いにしへの
人さへ見きと　こを誰か知る

「妻の紐を、結うや川内のよい景色。昔の人も見ただろうと誰が知ろうか。いや、知るまいなあ。」今度は、夫が妻の紐を結んでいる。そして、「萬代まで見よう」と未来を思って詠んで歌をうけて、今度は未来から過去を振り返る立場で詠んでいる。この万葉人と、同じように思わずにはいられない。私が、小さな頃を過ごしたこの川の景色を大切に思っていると、遠い未来の誰が知ろうか。遠い過去の誰が知ろうか、と。それでも、一本の川を通して、一首の和歌を通して、きっと同じ思いが続いていく。美しい川の流れの続くかぎり。

「奥様はご主人のネクタイを結び、ご主人は奥様のスカーフを結ぶような、仲むつまじいお二人でいてください。」万葉のむかし…と言いかけて止めた。結婚式のスピーチは、幼なじみの幸せの涙で結んだ。

名張川（奈良県）